HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Characteristics and surgical outcomes of consecutive exotropia of different etiologies

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2016-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 麻友 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2915

論文審査の結果の要旨

内斜視矯正手術の長期的合併症として術後外斜視がある。術後数年から数十年かけて過矯正がおこり発生するもので、その原因として手術された内直筋の眼球への付着部の異常が指摘されている。申請者は当院の術後外斜視例における矯正手術時の内直筋の付着部を slipped muscle 群、stretched scar 群、付着部異常のない正常群の3群に分類した。slipped muscle は、内直筋を包む筋鞘は眼球に付着しているが、筋実質は眼窩深部へとスリップしたもの、stretched scar は強膜への付着部と内直筋の間に伸展した結合組織を認めるものである。3 群において術後外斜視矯正手術前後の臨床的解析を行った。申請者は以下の結果を得た。術前の近見斜視角は slipped muscle 群で正常群と比較し有意に斜視の程度は強かった。術後の斜視角の 1 ヶ月あたりの変化量は 3 群間に有意差はなかった。他覚的屈折検査では正常群でのみ術眼で非術眼に比べ有意に遠視を認めた。立体視検査では、術前はすべての症例で立体視を認めなかったが、術後外斜視矯正手術後には slipped muscle 群で 3 例、stretched scar 群で 1 例が立体視を確認できた。正常群では立体視を得られた症例はなかった。初回手術後の再発例を内直筋の付着異常を分類して再手術後の経過を長期に観察した報告は過去にない。申請者らは次の興味深い知見を見出した。屈折検査では正常群で有意に不同視の発生率が高く、また正常群のみ立体視の回復を得た症例はなかった。これらのことから、術後外斜視の発症に関与する要素のうち機能的な要素と解剖学的な要素は独立していることが考えられた。以上の結果は再手術症例を多数集めること、再手術時付着部を詳細に解析し、かつ術後長期に観察することにより判明した事実であり、臨床的に極めて重要な知見である。術後外斜視の発症機序を知る上で重要な示唆を与える論文である。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者　　主査　金山　尚裕
　　副査　岩下　寿秀　　副査　峯田　周幸